

卒業生代表の言葉

春の穏やかな光の中、私たちは今日、この学び舎を巣立つ日を迎えました。本日は私たち165名のためにこのような温かい卒業式を挙げていただき、お集まりくださった先生方、保護者の皆様、関係者の皆様に、卒業生一同、心より御礼申し上げます。

六年前の春、私たちの学年生活は思い描いていたものとは違うスタートを切りました。入学式は異例のオンラインで行われ、登校が始まってからもしばらくは分散登校が続きました。クラス全員がそろって顔を合わせることもないまま学校生活が始まり、「本当に学校生活が始まったのだろうか」となかなか実感がわかなかったことを覚えています。

行事の中止や縮小、部活など日常の活動にも制限が入るなど、想像していた学校生活とは違う現実戸惑うこともありましたが、それでも私たちは、その状況の中でできることを考え、仲間と共に一歩ずつ前に進んできました。振り返れば、この6年間で数えきれないほどの思い出が積み重なっていました。教室での何気ない会話、行事に向けて準備を重ねた日々、意見を交わしながら一つのものを作り上げた経験。その一つ一つが、私たちにとってかけがえのない思い出となりました。

私自身、生徒会活動に関わる中で、多くのことを学びました。生徒会長という立場になったとき、学校全体のことを考えて判断することの難しさを実感しました。生徒の意見、学校の方針、それぞれの立場を理解しながら、よりよい形を模索する日々で、意見がぶつかり、答えが簡単に見つからないこともありました。しかし、先生方や仲間と話し合いを重ねる中で、少しずつ見えてきたことがあります。それは、社会には一人で出せる「正解」などないということです。異なる意見を持つ人と向き合い、互いの考えを尊重しながら、よりよい答えを探していく。その姿勢の大切さを、この学校での経験を通して学びました。

学校は、社会の縮図だと言われます。この学校での学びもまた、社会とつながっていました。世界で起こる出来事についても、私たちは授業の中で考える機会を多くいただきました。

ウクライナで戦争が始まると、その問題はすぐに授業で取り上げられました。遠い国の出来事としてではなく、同じ世界の一員として自分たちはどう考えるのかを問いかけられたことを覚えています。それ以来、私はニュースを追うようになり、なぜ戦争が起きているのか、その背景にある歴史や関係性を自分なりに調べるようになりました。授業での議論や調べ学習を通して、世界の出来事は遠い場所の問題ではなく、私たちの生きる社会とつながっているのだと実感しました。

神奈川学園では、ただ知識を学ぶだけではなく、自分の視野を広げ、自ら問いを持ち、調べ、考え続ける探究の学びが大切にされていました。その経験を通して、私は、与えられた答えを受け取るだけではなく、まず自分で調べ、考え続ける姿勢の大切さを学びました。私はここで学んだことがきっかけとなり、将来は医療の道に進み、人の命や健康に関わる立場として社会に関わっていきたくしています。医療の現場もまた、簡単に一つの正解が出る世界ではありません。患者一人ひとりの状況や思いに向き合いながら、その時にできる最善の判断をし続けることが求められるでしょう。神奈川学園で学んだように、目の前の出来事から目をそらさず、自分で調べ、考え続ける姿勢を忘れずに、社会と向き合っていきたいと思います。

今日、六年間を共に過ごしてきた仲間たちとも別れのときがやってきました。同じ教室で笑い合い、ときには悩みながら支え合ってきた日々は、これから先も私たちの心の中に残り続けるでしょう。

ここで出会った仲間、支えてくださった先生方、そして家族への感謝を胸に、私たちはそれぞれの未来へと歩み出します。神奈川学園で学んだ「一人では正解を出せない社会の中で、互いの考えを尊重しながらよりよい答えを探していく姿勢」を胸に、社会の中で自分の役割を見つけ、自らの力で未来を切り拓いていきたいと思っています。

結びにあたり、これまで私たちを温かく導いてくださった先生方、そして支えてくださった保護者の皆様、関係者の皆様に、卒業生を代表して心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。